

## 留学体験記

竹村 初美

二〇〇四年七月からハワイ大学マノア校の宗教学科修士課程でハワイ先住民文化について学んでいる。二年間の留学期間も、すでに半ばが過ぎた。留学にあたっては、多くの方々から援助をいただいた。いつかお返しを、と言えればよいのだが、上の世代の人々からいただく恩というのは、返せると言うほうが傲慢だろう。お世話になった方々にはただ感謝の意を申し上げておきたい。

さてこの度、研究室の榎本さんから留学体験記を書くように、どのお申し越しがあった。ハワイ研究の現状、といった話は皆様に再会したときの楽しみにとっておくことにして、本稿ではもっぱら個人的な体験と感情生活のスケッチに終始した。留学先からの少し長いお便りとしてお読みいただければ幸いである。

私のアメリカ生活は、ニューヨーク州北西部のバッファローという街で始まった。エリー湖に面し、カナダとの国境やナイアガラの滝にほど近い静かな街である。二〇〇四年七月二十日のことだ。留学も初めてなら、アメリカ本土に降り立つのも始めてである。興奮していたのだろう、この日の日記を読み返すと、見聞きしたことがこと細かに書きとめてある。乗り継ぎで降りたシカゴ・オヘア空港のポーターが身長二メートルの巨人だったとか、バッファロー行きの飛行機の中で一心不乱にプレッツェルを食べ続ける老婦人を見たとか、実にどうでもいいことまで微に入り細に入り描写されている。

バッファロー空港でタクシーに乗り、市の郊外にあるニューヨーク州立大学バッファロー

校に向かった。翌日から三週間にわたり、ここで世界各国のフルブライト留学生を対象とした研修が行われるのだ。不肖私もその端くれである。このような立派な奨学金をいただいてしまったことは、自分にとって一大事件であった。また少なからず気後れもしていた。実力もないくせになぜか馬券が売れてしまった競馬馬のような気持ちだ。浄財を投じてしまわれた方々には、レース後なんと云ったらいのだろう。

どうも字面が立派すぎる——出発前から、私はくすぐったく思っていた。まったく「留学」だなんて、額にでも入れて飾っておきたいような言葉ではないか。そう思ってやにさがっていたのだ。だが実のところは、立派すぎるなどと案ずるまでもなかったのである。留学という輝かしい二文字の実際は、私の身の丈にふさわしく、じゅうぶん格好悪いものだった。最初期にあたるバッファローでの三週間などは、格好悪さで塗り固められていたと言ってよい。

さて、滞在先となる大学構内の寮に着いてみると、職員の方のほかにはまだ誰もいない。どうやら早く来すぎてしまったらしい。気を取りなおして街に出かけることにした。記念すべきアメリカ生活第一日目だ。私は足取りも軽く出かけていった。

だがその帰路、私の足取りはうってかわって重かった。買い物先でダイム(10セント硬貨)とクォーター(25セント硬貨)をまちがえて出し、そのうえ相手の英語が分からず立ち往生して、店員に叱られたのである。あんなに頭ごなしに怒鳴られたのは、小学五年生のころ、窓をよじ登って教室に入ったところを先生に鉢合わ

せて以来のことだ。「初日からなんという輝かしさだろうか。この国では、私はまるで三歳児だ」——いま日記を読み返してみると可笑しく思うだけだが、当日の私はこんなことを書き記し、どうやら本気で嘆いている。(あまりにも情けない話なので補足しておく、大学内ではさすがに一応の用は足せていた。だが一歩外に出ると、早口の英語がまるで分からず途方にくれる、ということがままあったのである。)

大学構内は途方もなく広く、まっすぐ続く道には人の姿がまるで見えなかった。レンガ敷きのキャンパス・ロードはずっと向こうまで続いている。そこをとぼとぼと歩く。面憎いことに、眼前に広がるバッファローの夕日がまた信じられないほどに美しい。オレンジ色と藤色の空が上下に境を接しているのだ。遠景に、黒い針葉樹林がどこで終わるともなく広がっていた。あの向こうにはインディアン居留地があるという話だ。遠くまで来てしまったな、と思った。

海外経験が乏しく、語学力にも不安を抱えたまま留学すると、一時的に「子ども返り」を経験することになる。夏目漱石はロンドン留学当時の自分を「狼群に伍する一匹のむく犬」になぞらえたが、アメリカ到着後最初に私が抱いていたセルフ・イメージは「無力な仔犬」であった。四捨五入すれば三十になるうというのに、あつかましい話ではある。だが、留学最初の三日ぐらひは、それこそ四、五歳の子どもと変わるところがなかった。文化的ギャップだとか考え方の相違だとか、そんなもったいぶった言葉を使うまでもない。もっとうと即物的で情けない問題でてんやわんやなのだ。「国際理解」「異文化交流」「寛容の精神」——東京でのフルブライト留学プログラム説明会で聞いた高邁な言葉は、いざ現地に来てみると、とたんにほろか彼方へ去っていった。代わってこちらにやってくるのは、「迷子に

なりました」「分からないのでもう一度言ってください」といったフレーズ群である。

寮のロビーに着いた。と、私と同年代らしき人々がスペイン語なまりやアジアなまりの英語でなにやら真剣に話し合っている。きっと仲間の留学生たちだろう。会話の断片が耳に入ってきた。「空港からタクシーに乗ってきたんだけど、降りる段になって思い出したんだ。この国ではチップという習慣があるだろう。ところがいくら払ったらいいか分からない。だから運転手に言ったんだ、『ミスター、僕は今日この国に来たばかりなんだ。チップはいくら払ったらいいか教えてほしい』って」。思わずうれしくなってしまった。自分だけではないのだ。プログラムに参加した留学生たちは、多かれ少なかれ万事につけてこの調子だった。誰もがおっかなびっくり、この国での暮らしを始めようとしていたのである。

実際、私の感じているやりにくさなど小さいものだったのかもしれない。アメリカ的生活から遠く隔てられた国からも、大勢の留学生が来ていたのだ。彼らはもっとうと激しいとまどいを感じていたにちがひなかった。たとえば、二日目の夜のことで。自室に戻ろうとすると、私を呼び止める者がいた。「よかったら洗濯機の使い方を教えてもらいたいんだけど」。照れる様子もなく彼女は言った。聞けば彼女の家では、洗濯とは桶と洗濯板でするものであるようだ。

彼女とはこれが縁で親しくなった。仮に P と呼んでおこう。まだ二十歳になったばかりだという彼女はとても小柄で、十五歳と言われても信じられるほど幼く見えた。宗教を問われたので仏教徒だと答えると、目を輝かせた。首から提げた護符を示してみせ、国の写真を見せたいから部屋に来てと言う。アルバムはほぼ全編、彼女の通っていた山岳部の学校と、

崖の上に建つ僧院の写真から成っていた。級友たちの写真を見せながら彼女が言った。「アメリカに来たから、自分用の鉛筆削りを買いたいと思うの」地元では鉛筆削り器は高嶺の花であり、学校の備品として使うことはあっても、個人がもつことはないのだそうだ。

私は P の話に俄然興味をいだき、いろいろと質問してみた。結果、彼女が五つの名前をもち、五つの言語を話すこと、国でただ一人フルブライト奨学生に選ばれたことなどがわかった。しかも彼女の国で奨学生が選ばれるのは、二年に一度だけである。P がいかに優秀かがうかがわれた。実際、理系であるにもかかわらず、彼女はシェイクスピアの主要作品をすべて読んでいた。(洗濯機の使い方を知らなかった P であるが、面白いことにパソコンの扱いには長じていた。第三世界は、モダンの段階を乗り越えてポストモダン段階を経験する——電算室で彼女と席を並べてメールを打つ度、昔読んだそんな趣旨の本を思い出した。)

日を経るにしたがって、皆の連帯感が高まっていた。最も人気のあった話題は、アメリカの食べ物に対する不満と文句である。「どうやらこの国ではパンは売っていないようだ」と皮肉るドイツ人、「ニョッキが食べたい、ニョッキが食べたい」と願望をストレートにぶつけるアルゼンチン人、「甘い甘い、甘い。なにもかも甘すぎる。我々は毎日甘いものに攻めたてられているんだ」と嘆くパラグアイ人、「ねえ、お願いだからこんなものがほんとうの『寿司』だと思わないでね」と哀願する日本人(私)など、バラエティに富んだ米国批判が毎日のように聞かれた。

その次に人気があったのは、宗教に関する話題である。寮のホールで臨時の宗教会議が開かれ、深夜十二時を過ぎるまで議論が

続いたこともあった。ヒズボラを支持するというムスリムの学生が、「私たちの中にユダヤ人がいなくてよかったわ。悪いことだと知っていても、ユダヤ人を見ると殺したくなってしまうの」と発言し、物議をかもしたこともある。こうした発言を憎むことは簡単だったのかもしれないが、できなかった。彼女が泣いているところを見たからだ。私のルームメイトのチュニジア人にしがみつき、「みんな私のことをテロリストだと思ってる」と泣いていた。

私の部屋の周りにはたまたまムスリム女性が多かった。彼女たちの幾人かとはだいぶ話しこんだ。深夜、修学旅行の夜のような雰囲気の中、「ボーイフレンドがクリスチャンの外国人なの」と打ち明けられたこともある。家族には秘密だという。露見すれば縁切りの可能性もあるそうだ。「私が宗教に関して唯一不満に思っていることは、それ」と彼女は言った。

アメリカ生活に不慣れな我々は、「身を寄せ合う」という表現がぴったりの暮らしを送った。異国での新しい生活に困惑したり喜んだりしながら、三週間は瞬間に過ぎていった。さまざまなことが、今も鮮やかに思い出される。西アフリカ諸国の学生が、日本の戦後史年表をすらすらと唱えたこと。二歳の時に父親を反政府ゲリラに殺されたというウガンダ人が、「スーダンはこの世の地獄だよ」と言ったこと。「僕はラティーノの男だろ。アジア女性には、国でやるみたいに軽々しく身体接触してはいけないうって警告されているんだ」と言っていたひょうきん者が、最後のお別れの挨拶に、ものすごく大きな音を立てて私の頬にキスしていったこと。同一人物が研修授業中、皆の面前で「日本女性には特別なものを感じるよ」と言い放ったこと。(自慢話である。露骨すぎて気づかれないといけないうので注記しておく。ただし、彼がまったく同じことを中東の女性に言ってい

た点も忘れずに付記しておきたい。)

八月五日、研修最後の日がやって来た。Pと別れるのが、私にはなににより辛かった。スーツケースに荷物をつめる小さな背中を見つめていると、喉元にこみ上げてくるものが抑えられない。この小さな娘にすっかり依存するようになっていたのだな、と思った。平静を装って荷造りを手伝ったが、最後にウサギのぬいぐるみをスーツケースに入れて、かちりと錠をしめた音が、今も耳に残っている。

やがて、どうとう空港行きのバンがやってきた。ルームメイトとして色々なことを語り合ったチュニジア人、忍耐強さと親しみやすさで皆に好かれていたコートジボアールの女性、そしてPが、同じ車で出立しようとしていた。私は見送る側である。途中までは笑っていたが、やはり駄目だった。結局泣き崩れて両腕をPの背中に回し、彼女の名前を何度も呼んだ。彼女も、他の二人も泣いていた。我々四人は子どものようにわあわあと泣き、何度も抱き合って別れの言葉を述べた。

三人が去った後、部屋にこもって机に突っ伏していると、隣室のモロッコ人が来て、肩を抱いてくれた。「人と別れて泣くのは素晴らしいことよ。それに値する出会いを神が与えて下さったということなのだから」と彼女は言った。私はますます盛大に泣き伏した。

八月六日、飛行機は無事ホノルルに到着した。飛行機は無事だが私はあまり無事ではない。フライト中、周囲の目もはばからず泣き通しに泣き通したのである。読んでくださっている方ももうんざりしてきたことと思われるが、事実である以上お構いなしに泣く。声こそどうにか押し殺したものの、しまいには目も鼻も真っ赤になった。乗務員の女性が見かねてトイレから山ほど紙をもってきてくれた。さぞかし変な外国

人だと思われたことだろう。隣の席では母親に抱かれた赤ん坊がすやすやと眠っている。いったいどちらが赤ん坊なのだから分からない。留学当初は子ども返りしていた、と書いたがこれほどひどいのは後にも先にもない。Pのこのこと、皆のこと、思い出すと後から後から涙があふれてきた。これからは私だけが本土を離れ、遠いハワイで独りになるのだ。二年間もどうしてやっていったらいいんだらう。

だが、人間というのはたいへん薄情なものである。と言って悪ければ私はたいへん薄情者である。ホノルル空港に降りると、南国特有の温かい空気、すこし土の匂いが混じったあのかぐわしい空気が全身を包んだ。もわっ、と音がするような、独特の空気である。どこからか、スラック・ギターのハワイアン・ミュージックが聞こえてきた。そのとたん、痛切な(と、思われた)悲しみが嘘のようにけろりと晴れた。代わって、新たな興奮の波が押し寄せてきたのである。ハワイだ！ハワイに行かれたことのある方なら、あの空気に出迎えられる一瞬の感覚をご存知のことと思う。エコノミーの狭い座席から解放され、ホノルルの地に足を踏み出すときのあの晴れやかな感じ。あの何物にも代え難い感覚である。今やすっかり、頭上に広がるポリネシアの空のごとき気分になっていた。今泣いたカラスがもう笑う、を地でいくように、頬を緩ませうきうきと歩を進める。私は自分が多分に衝動的な人間であることを自覚している。

その数日後、ホノルルの新住所にPからの葉書が届いた。一行、「あなたのシンプルな顔と心が、私はとても好きでした」とあった。余人がどう思おうと、私はこれを生涯最高の賛辞だと思っている。こうして、人生で最もめまぐるしかった三週間は幕を閉じた。

さて、その後のホノルルでの生活であるが、いたって順調です、というほかない。バッファローでの幸福な時間が終わったあとも、私は運に恵まれたようだ。幸運のひとつは、指導教官の John Charlot 教授ととてもよい関係が築けたことである。教授は文献的な裏づけに妥協を許さぬ厳密な実証主義者である一方、茶目っ気たっぷりチャーミングなおじいちゃんである。毎週のオフィス・アワーでのやりとりは、今後も思い返すたびに温かい気持ちになるであろう思い出だ。私が拙い英語と、もっと拙いハワイ語で、どうにか意図する質問をもちだそうとする度、教授は首をひねったり、苦笑いしたりしつつも、辛抱強く聞いて下さった。時には私の言うことを面白がって下さる。ただ最近、教授がしみじみとした口調でおっしゃったことがあった。「進歩したね。最初の頃は、ゼミで君の発言を聞くとしょっちゅう、”Oh, no, Hatsumi!”って気分がさせられたものだが」と、片手で顔を覆うくささしてみせる。どうもやはり呆れられていたようである。

ふたつめの幸運は、ハワイ語の美というものに気づいたことである。ハワイの神話と文学がもつユーモア、カオナ(kaona)と呼ばれる詩句の多層性は私を魅了した。ハワイ語は日本語以上に文脈依存の度合いが高く、曖昧な表現に満ちている。だが、この言語にとって曖昧さとは、避けるべきものではなく喜ばしいものなのだ。ひとつひとつの語が複数の意味をもち、文が多層的な意味を持つということが、アートとして評価されるのである。たとえば、創生神話『クムリボ』のある一行は、一読しただけでは単純な情景描写としか思われぬ。だがそこにある角度からの解説が加えられることで、突如として別の意味の重なりが見えてくるのだ。思えば日本にいた頃に取り組んでいた題材は、美とは無縁のものだった。ポスト・コロ

ニアリズムについての本を読みかじり、それをハワイ先住民運動の例に当てはめようとしていたのである。無駄なことをしていたとは思わないうが、せっかくの美しいものを見落としていたのはもったいないことだった。モッオレロ(mo`olelo、物語、歴史、伝説)を読んでいると、時おりそんなことを思う。

この場所で、今日までいろいろなおことがあった。「ちょっとその **fucking frying pan** をとってくれない、**bitch!**」という話し方をするティーンエイジャーと暮らしたこと、大家の差別的発言に怒った女子寮の入居者たちが反乱を起こした事件、無駄毛を剃らない主義の美しいウクライナ人とワイキキ・ビーチに出かけたこと、大学のハワイアン・スタディーズ・プログラムで味わった少し苦い経験、などなど話したいことはたくさんあるが、紙幅が尽きた。帰国後、皆様に再会して続きを聞いていただける機会があれば、幸せなことだと思う。その日までもう少しの間、ここでの生活を楽しむことにしたい。